



ニュース

食事調査、 13年度も継続実施 コープふくしま

コープふくしまの「実際の食事に含まれる放射性物質量の測定」(以下、食事調査)は、11年11月から開始され、12年度には2回行なわれました。継続した測定を実施していることから、行政や学術組織などからも、その結果に注目が集まっています。

食事調査の説明会に 41人の組合員が参加

13年6月19日、20日、「実際の食事に含まれる放射性物質量の測定調査参加者のつどい」が、郡山さんかくプラザ(郡山市)、コープマートいずみ(福島市)の2会場で行なわれ、計41人の組合員が参加しました。

両会場とも、測定を行なっている日本生協連商品検査センターの職員が、放射能についての解説と調査の具体的な説明を行いました。その後、福島県立医科大学 放射線健康管理学講座の宮崎 真さんから、体内の放射性セシウムのおよその量を測定するホールボディーカウンタ(WBC)についての説明がありました。食事調査とWBC測定を組み合わせることに意味



会場では、食事調査に初参加する予定の組合員に対し、参加経験のある組合員がアドバイスなどを行っている姿が印象的でした。

があります。仮に食事調査から検出限界値以上の数値が出たとしても、WBCの測定を定期的に受け、そのデータを見ることで、たまたまそのとき検出限界値を上回る食事を取ったのか、それとも恒常的に取っているのか、推測できるのです。そして、今後の食生活について見直すきっかけにもなります。

コープふくしま常務理事の穴戸 義広さんは、「漠然と『安全』というイメージではなく、定期的に食事調査やWBCの測定を受けることで、実態に基づいた判断ができるようになります。生協でも、病院や医科大学と協力

してWBCによる測定もやっていますので、ぜひ参加してください」と呼び掛けていました。

食事調査の取り組みを、 「食育推進全国大会」で発表

13年6月22日に広島県広島市で「第8回 食育推進全国大会」(主催：内閣府)が行なわれ、パネルディスカッション「つくる人、売る人、食べる人、みんなの力でつなげる・広げる食育の環」の報告者として、コープふくしま組合員理事の小澤和枝さんが登壇しました。

小澤理事は、「原発事故による放射能汚染に向き合って」をテーマとし、コープふくしまが日本生協連商品検査センターと協力して11年度から行



「食育推進全国大会」のパネルディスカッションに登壇した小澤理事(写真左)。

なっている、食事調査の結果報告をメインに、ホールボディーカウンタ(WBC)の測定の取り組みなどについて報告しました。パネルディスカッションの聴講者は、グラフなどで示される調査結果を見ながら、熱心に耳を傾けていました。

発表を終え、小澤理事は、「『食』に関係する方々が全国から集まる大きな大会で、福島のことを伝える機会を頂戴し本当にうれしく思います。取り組みを伝えることで、福島の実状を正しく理解していただき、イメージではなく、それぞれの方のものさしで考える機会としていただきたいです。そして、多くの方に、『買って支える』という支援の仕方があることを知っていただけたらと思います」と話していました。



組織として買って支える取り組みを行なっている生協についても、紹介がされていました。



植樹後、バスボランティア100回記念植樹の記念撮影に参加者と。

バスボランティア 100回記念 「植樹式」を実施 いわて生協

いわて生協では、「被災地でボランティアをしたいが、個人ではなかなか参加できない」との声に応え、2011年6月より内陸の市町村から沿岸部の被災地域に向けてバスボランティアを開催してきました。12年12月末までに計92回開催し、生協組合員や職員、地域の方々など、延べ3,552人が参加しています(1月～3月期は休止)。



植樹されたのは、花や実、紅葉などで四季の移ろいを感じさせてくれる、マンサク、クロモジ、ムシカリ、ウリハダカエデの4種10本。

13年も4月から再開し、7月13日で100回目を迎えました。この日は、いわて生協の60人に加え、遠く近畿圏から合同でバスボランティアを開催してきた、おおさかパルコープ、大阪よどがわ市民生協、ならこープの組合員など30人、それにこープいしかわの組合員など10人が参加して、陸前高田市米崎町・再生の里ヤルキタウンで記念植樹式が行なわれました。いわて生協・組織本部、復興支援担当の小野寺真さんは、「今回植樹された木の成長を、今後も継続的にこの地を訪れるボランティアの皆さんに見守っていただきたい。そしてこの木の成長自体が陸前高田市の復興のシンボルになればと思います」と話してくれました。

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

コープふくしま 地域理事 齋藤恵理子

理事になって1年。全国の皆さまからの温かいご支援に日々励まされながら活動しております。

震災から2年がたった今も、まだまだ先が見えない状態が続いている福島です。

家があっても自宅に帰れない人、自らの判断で避難している人、避難したくても避難できない人、避難の必要がないと考える人……さまざまな立場の人たちが複雑な思いを抱えながら生活しています。

それまで全く関心を持っていなかった放射能が突然身近なものになり、最初はただ「怖い」の一言でしたが、学習会を重ねることで、迷いながらもだんだんと放射能を理性的に怖がるできるようになりました。検査体制や生



産者の方の取り組みを知ること、最初は避けていた福島県産の食べ物も今は積極的に消費しています。

しかし一方で、一度植え付けられた恐怖心を払拭できずに、今も見えない不安におびえている方がたくさんいらっしゃいます。それぞれの立場や考え方の違いを認め、互いを尊重する気持ちが今の福島では特に大切なことに思えます。

2年以上も仮設住宅での暮らしを余儀なくされている現実。言葉にできない胸の内は計り知れません。集会所でのふれあいサロンでは、少しの非日常を提供させていただくことで、入居者の方の心に晴れ間が広がるお手伝いできればと思っております。

「花も実もある福の島」。全国の皆さまに足を運んでいただき、福島の「今」を見ていただきたいです。福島を感じていただくことが福島の復興につながります。

皆さん、ぜひ福島に来てくなんしょ!

メッセージ全文は、日本生協連「復興支援ポータルサイト」内、「つながろうCO-OPアクション情報」バナーをクリックし、ご覧いただけます。「日本生協連 復興支援ポータルサイト」でインターネット検索を。



きゅうり栽培を復活させた農家の山田幸雄さん、幸子さん夫妻。

リサーチ「被災地のいま」

生産現場～宮城県石巻市

宮城県の沿岸、石巻市でも復興は始まったばかりです。多くの事業者が廃業や移転を余儀なくされる中、現地にとどまり、必死に立て直しに取り組む企業が存在します。生産拠点を復活させ、取引先を取り戻して経済的に立ち直るだけでなく、地域の希望にもなりつつあります。

孤独と戦いながらの 営業が続く

宮城県の太平洋沿岸、石巻市。見上げるほどあったガレキの山は、2年以上をかけた処理でなくなりつつありますが、町の復興は始まったばかりです。

石巻漁港や魚市場を中心に広がる水産加工団地には200社ほどの水産加工業者がありました。津波の被災や、港・市場の復旧を待たずに廃業や移転した企業は少なくありません。

そんな中、石巻漁港に近い明神町で被災し、必死に復興に挑むのが(有)ヤマユ佐勇水産です。震災当日は家族バラバラで避難し、全員が再会できたのが震災からひと月後でした。比較的被害の少なかった工場を新たな生産拠点として2011年秋に営業を再開



ヤマユ佐勇水産の佐藤由隆社長と尖子さん夫妻。新工場には、「心ひとつに」「いまからここから」の文字が。

石巻漁港の東、渡波地区で工場と店舗が被災した高砂長寿味噌本舗は、震災後、社長以下、従業員10人以上が店舗の2階で暖房もない中、ひと月の共同生活に耐えました。震災3週間後に無事だった東



高砂長寿味噌本舗の東松島工場と高砂光延社長。



しました。13年6月に新工場の竣工で本格的に復活しましたが、周辺の同業者のほとんどが廃業か移転で姿を消し、孤独と戦いながらの営業が続きます。新しい工場がこの土地の希望の象徴です。

地域で待ち望まれていた 味噌と醤油が復活

松島工場と連絡がつき、5月初めから味噌の製造を再開、渡波の工場でも4カ月がかりの後片付けの後、7月から醤油の製造を再開しました。主力商品の濃口醤油は、その年の仙台味噌醤油品評会醤油部門で最高賞を受賞するほどの品質。地域では飲食店をはじめ、食品の調味料として同社の味噌や醤油を使っている業者は数多く、誰もが復活を喜びました。

一步一步進みながら きゅうり栽培を再開

沿岸から1kmほど内陸できゅうり栽培を営んでいた農家の山田幸雄さんは、所有する700坪の巨大なハウスに津波が流れ込み、収穫中のきゅうりをすべて失いました。しかし、直後からジャッキでハウスの支柱を持ち上げ、2、600坪にも及ぶ敷地内の泥をかき出し、11年夏、塩害が心配されましたが栽培を再開、何とか復活を遂げました。生協産直きゅうり部会仲間の6軒の農家には命を落とした人、大きな被害を負った人がおり、一時は一軒できゅうりを作り続けましたが、今はまた仲間が増え始めています。

(文・写真 山本明文)